

ひがしもろ 宮崎県東諸の方言について

合原 加奈美

0. はじめに

先行研究⁽¹⁾より、筆者の出身地域である「東諸」という地域では宮崎県の二大方言（日向方言・諸県方言）の中間となるような方言が使用されていると知った。地理としては諸県方言に所属しているのに近年では日向方言の特徴が強くなっているという。東諸の方言の扱いは、日向方言に含まれたり、諸県方言を記述している論文では取りあげられなかったりと文献によってさまざまである。

自分が使用している方言がそのような特殊な位置づけであることに興味を持った。そして、宮崎県の二大方言である日向方言と諸県方言の特徴をそれぞれどのくらい所持しているかを明確にし、東諸で使用される方言（以下東諸方言）の現状を記述することにした。

1. 宮崎県の方言区画

宮崎方言には大きく分けて「日向方言」と「諸県方言」がある。宮崎県の方言区画の一例として図1.1に岩本（1983）による方言区画図を挙げる。宮崎の二大方言である日向方言・諸県方言および東諸について以下でそれぞれ説明する。

1.1 日向方言

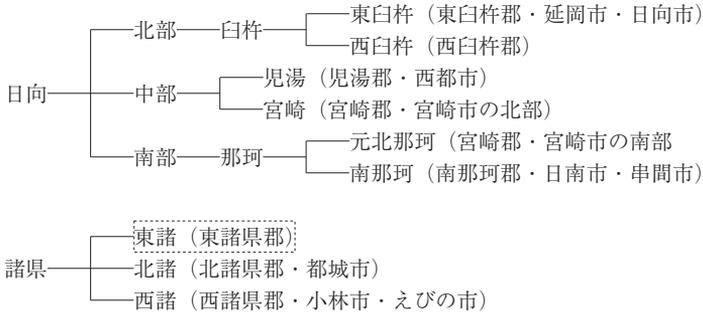
日向方言が使用される地域は広く、生活区分も個々に分かれていたため、使用される方言も生活区分ごとに異なる。よって、日向方言は数ある小方言の総称で、統一した大きな特徴が見られないと言われている。

1.2 諸県方言

諸県方言は言語的性格において、隣の鹿児島県で使用される薩隅方言⁽²⁾に属し、非常に特色がある。長音短呼が徹底しており、長音が見られない。例えば推量の意味の「ヤロー」は「ヤロ」、暑いを意味する「アチー」「ヌキー」は「アチ」「ヌキ」と発音される。また、ラ行音が転化する現象が多くみられ、ラ行音が撥音化・促音化・イ音化する。

そして、諸県方言が属する薩隅方言で最大の特徴となるのが閉音節の存在である。母音の脱落によって促音がうまれる現象で、主にキ・ク・チ・ツ・ギ・グ・ビ・ブ・ヂ・ヅで

図 1. 1



出典：『講座方言学 9—九州の方言—』 P271

見られる。

1. 3 東諸について

宮崎県東諸郡に位置する。次ページの図 1. 2 の着色部分である。筆者の出身地域は、2006年の市町村合併まで東諸郡に含まれていた。大型の店舗や高等学校などが少ないため、買い物や通学、通勤のために隣の宮崎市に足を運ぶ機会が多い。

「東諸郡」の中に「諸県」という単語が入っており、地理的には諸県方言に区分されそうである。しかし、次第に日向方言化してきており、他の諸県地域で使用される方言とはかなり相違しているという。先行研究における東諸の方言の扱いは日向方言の一部としているもの、諸県（薩隅）方言の一部とするもの、諸県方言を述べる上で例外にするものなどさまざまである。図 1. 1 では、東諸が諸県方言と日向方言の中間的存在であることから点線で囲まれている。

筆者の出身地域は宮崎市と合併してしまい今は東諸郡ではないが、位置はかつてと変わらず東諸の地域にあると考えている。ここ最近の市町村合併自体が方言に大きな影響を与えるとも考えられない。よって、本稿においては筆者の出身地域は宮崎市としてではなく、東諸の地域として考察する。

宮崎県の二大方言は日向方言と諸県方言であり「東諸方言」という語は筆者の知る限り使われていない。しかし、本稿では便宜上東諸の地域で使われる方言を「東諸方言」と呼ぶ。

2. 調査の概要

大きく分けて 2 つの調査を行った。その調査に協力してくれたインフォーマントと調査の内容を説明する。

2. 1 インフォーマント情報

インフォーマントは次ページの 4 人である。全員二つの調査に協力してもらった。

図1.2

宮崎県方言区画図



出典：『現代日本語方言辞典 第1巻』p284 ※色付けは筆者による

・インフォーマント1

性別：男性
生年月日：1935年7月25日
年齢：76歳
言語経歴：0歳～76歳
宮崎県東諸県郡（宮崎市）高岡町

・インフォーマント2

性別：女性
生年月日：1964年3月24日
年齢：48歳
言語経歴：0歳～48歳
宮崎県東諸県郡（宮崎市）高岡町

・インフォーマント3

性別：女性
生年月日：1989年7月1日
年齢：22歳
言語経歴：0歳～18歳
宮崎県東諸県郡（宮崎市）高岡町
18歳～22歳
千葉県千葉市稲毛区

・インフォーマント4

性別：女性
生年月日：1993年2月11日
年齢：19歳
言語経歴：0歳～19歳
宮崎県東諸県郡（宮崎市）高岡町

※年齢は2012年5月2日現在

言語経歴内の「(宮崎市)」は市町村合併後、「東諸県郡」の部分が「宮崎市」と置き換わることを意味する。

インフォーマント1、2、4について、選定した条件としては生まれてから今まで東諸で生活していること、それぞれ違う年齢層ということである。

年齢層について、インフォーマント1が老年層、2が中年層、3・4が若年層とした。

3は筆者である。大学時代を千葉で過ごしているが宮崎の方言を話すことができると自他ともに考えている。しかし、念のために同じ若年層であるインフォーマント4にも調査を行った。

2.2 先行研究における東諸の特徴確認

先行研究⁽³⁾に特記されている東諸地域の方言の特徴⁽⁴⁾について、現在も使用するか否かインフォーマントに質問する面接調査で現状を確認した。回答の種類は「(自分が)使う」「使わないが聞いたことがある」「使わないし聞いたことがない」の3つである。

2.2.1 調査の目的

宮崎方言の先行研究ではやはり二大方言である日向方言、諸県方言について記述されていることが多く、東諸に特記した記述は少ない。その数少ない東諸の記述についても、筆者の内省においては現在も使用されているか疑わしい特徴が多かった。よってこの調査ではその数少ない東諸の特徴の現状だけでも明らかにしたいと考え、東諸居住者を対象に年齢層別に使用状況を確認した。

2.3 談話収録による調査

インフォーマントの会話を録音する自然観察調査を行い、そこから方言の特徴を取り出した。1回30分～40分程度の録音を3回行った。会話の録音については調査前後にインフォーマントに承認を得ている。

2.3.2 調査の目的

2.2の調査を行ってみて、質問形式でインフォーマントに方言のことを聞くと、「方言を意識したことがないからよく分からない」と悩ませてしまう場面が多かった。そこで自然な方言をそのままみるべくビデオやボイスレコーダーでインフォーマントの会話を録音することにし、そこから東諸で使われる方言の特徴を抽出することにした。

それらの方言を4.で取り上げ、先行研究で述べられている内容と一致するかどうか、諸県方言と日向方言の特徴をどのくらい有しているかを考察した。

3. 先行研究における東諸の特徴確認

3.1 調査項目

今回の調査で確認した項目は、先行研究⁽⁵⁾に記されている以下の東諸の特徴についてである。

[1] 断定の表現（一層強く指定する場合）に「～サル」を用いる。

例：アリヤ人チャネシテ、カカシサルガ（あれは人じゃなくてかかしじゃないか）
（岩本、1983、p284）

[2] 共通語での丁寧表現「～ます」を「～モス」「～モース」「～モンズ」と言う。

[3] 帰着点の「～まで」を「～マヂ」「～ズリ」と言う。

[4] 逆接の「～けれども」にあたるものは日向方言で使用される「～ケンド（ン）」と諸県方言で使用される「～ドン」が併用されている。

[5] 老人層では多少の敬意を伴う終助詞として「～ヲ」「～ヤヲ」「～カラ」が使用される。

[6] 動詞に付く尊敬表現として「～ナハル」「～ナル」「～ヤハル」「～ヤル」を使用する。

[7] 「～さえ」を「～セカ」と言う

[8] 語中・語尾の「ル」「リ」が「イ」になる。

例：クイマ（くるま） マツイ（まつり）

[9] ラ行音がダ行音に変化する。

例：ダッキョ（らっきょう） ドソツ（ろうそく）

[10] シの次のラ行音がタ行音になる。

例：ウシト（うしろ） ハシタ（はしら）

[11] 「～です」にあたる「～ゼス（ジェス）」「～ジェース」「～ジェンス」が使用される。

[12] 「～ございます」にあたる「～ゴゼンス」「～ゴジェンス」が使用される。

[13] 「～（して）ください」にあたる「～クダハイ」「～クダイ」「～クンナイ」等が使用

される。

※その他〜クダハリ・クダリ（クダイ・クデ）・クリヤイなどがある。

[14] 「〜（して）ください」の敬意の高い表現として「〜クッセシ」「〜クッゼンシ」がある。

[15] 理由を表す接続詞として「〜ディ」が用いられる。

[16] 「いらっしゃいます」にあたる「オゼンス」「オッジェンス」が用いられる。

[7] 『「〜さえ」を「〜セカ」と言う。』については、東諸に限らず県内全域で使われているということに調査後に気付いた。しかし、せっかく調査したのでこの結果も載せておくことにする。

また、[8] ～ [10] については上記の例の単語についてどのように言うかを調査した。「くるま」や「まつり」という言葉は直接口にせず、絵や実物を見せて「このことを何と申すか」と尋ねるなぞなぞ式で調査した。

使用状況は「使う」「使わないが聞いたことがある」「使わないし聞いたことがない」のいずれかで答えてもらった。はっきり回答が得られないもの（聞いたこと・使用したことがあるような気もするが正確には分からないもの）もあり、結果の表では「？」で記入した。

3.2 調査結果

結果を簡単にまとめたものが次ページの表3.1である。3.1に挙げた調査項目（表中では「特徴」）はスペースの関係上簡潔にしている。

表3.1によると全体的に年齢が高いほど使用及び使用されていた場面に遭遇することが多く、年齢が低くなるほど少なくなるということが分かる。方言の使用が薄れていく様子を視覚的に確認することができた。

この表中には書きこむことのできなかつた詳細な結果を以下に記述しておく。

「[4] 『〜けれども』の『〜ケンド（ン）・ドン』』について、インフォーマント3、4がこれらの代わりとして多く使っているものは「〜ケン」であった。

「[5] 敬意の『〜ヲ』『〜ヤヲ』『〜カラ』』では「〜ジャワヲ（〜でしょ!?)」「〜ストカラ？（〜するんですか?）」という使用例が得られたが、敬意は含まれていないように感じられたという。

「[8] 語中語尾のル・リ→イ」と「[9] ラ行音→ダ行音」について、インフォーマント1（70代）は○と答えている。「くるま」や「ろうそく」はそのまま「くるま」、「ろうそく（ろそく）」だが、「祭り」や「らっきょ」は「マツイ」「ダッキョ」と発音していた。

「[10] シの次のラ行音→タ行音」ではインフォーマント1は×となっている。しかし、インフォーマント2（40代）はインフォーマント1が「ウシト」と言うのを聞いたことがあると答えた。

「[11] 『〜です』の『〜ジェンス』』では「〜ジェンスナ（〜ですな）」という使用例が

表 3.1 調査による東語の特徴の使用状況

○…使う △…使わないが聞いたことがある

×…使わないし聞いたことがない ?…不明

特徴	インフォーマント	1 (70代)	2 (40代)	3 (20代)	4 (10代)
[1] 断定表現の「～サル」		○	△	△	×
[2] 丁寧表現の「～モス」		△	△	×	×
「～モース」		×	×	×	×
「～モンズ」		×	△	×	×
[3] 「～まで」の「～マヂ」		○	○	△	△
「～ズリ」		×	×	×	×
[4] 「～けれども」の「～ケンド(ン)」		○	○	○	△
「～ドン」		○	△	△	△
[5] 敬意の「～ヲ」「～ヤヲ」「～カラ」		△	△	×	×
[6] 尊敬表現の「～ナハル」		×	×	×	×
「～ナル」		×	×	×	×
「～ヤハル」		×	×	×	×
「～ヤル」		○	○	△	△
[7] 「～さえ」の「～セカ」		△	△	×	×
[8] 語中語尾のル・リ→イ		○	△	×	×
[9] ラ行音→ダ行音		○	△	×	×
[10] シの次のラ行音→タ行音		×	△	×	×
[11] 「～です」の「～ゼス(ジェス)」		×	×	×	×
「～ジェース」		×	×	×	×
「～ジェンス」		×	△	×	×
[12] 「ございます」の「～ゴゼンス」		×	×	×	×
「～ゴジェンス」		△	△	×	×
[13] 「～ください」の「～クダハイ」		×	×	×	×
「～クダイ」		×	△	×	×
「～クンナイ」		○	○	△	△
～クダハリ・クダリ(クダイ・クデ)・クリヤイ		○	△	×	×
[14] 敬意「～ください」の「～クッゼシ」		×	?	×	×
「～クッゼンシ」		△	△	×	×
[15] 理由の「～ディ」		×	×	×	×
[16] 「いらっしゃいます」の「オゼンス」		×	△	×	×
「オッジェンス」		△	△	×	×

得られた。

「[13] 『～ください』の『～クダハリ・クダリ(クダイ・クデ)・クリヤイ』の項目では、インフォーマント1、2それぞれ「クリヤイ」の発音が変化した「クリヤイ」を使用・聞いたことがあるとのことだった。

「[14] 敬意『～ください』の『～クッゼンシ』」について、インフォーマント1は「～

クッジェンシ」を聞いたことがあると答えた。

3.3 考察

3.3.1 東諸で使用されていたか否か

今回の調査では、理由の「～ディ」、帰着点「～まで」にあたる「～ズリ」は誰も使用されている状況を見たことがないという。70代のインフォーマント1ですら聞いたことがないということはその上の世代においても使用されていなかったのだろう。

この特徴について記述していた上村（1964）は「東諸県地方でも僅かにディが残るが、大勢は日向方言のカリ・カイである。」（上村、1964、p469）と述べている。単純計算すると、1964年当時インフォーマント2は0歳、1は29歳、1の親の代は50歳代ぐらいだろう。このとき「僅かにディが残る」というくらいなのだから、インフォーマントの親の世代ではほぼ使用されていなくて当然である。そして、ちょうどこの頃に「～ディ」がほぼ消滅したのだろうと考えられる。

「～ズリ」についても同様で、上村によると、「東諸県地方ではマザを用いるが、古老の一部にズリが残る」（上村、1964、p469）とあるので、インフォーマント1の祖父母の代が「一部」に入っていない限り、「～ズリ」を聞いたことがないというのは当然の結果であり、同時期に消滅したのではと推定する。

もちろん、単にインフォーマント4人という限られた人数、生活範囲（全員同じ町内に居住している）なので、より多くのインフォーマントや他の地域のインフォーマントを調査せずに「消滅した」というのは言い過ぎかもしれない。しかし、70年以上生きてきたインフォーマント1が聞いたことがないというのだから、「～ディ」「～ズリ」復活のためにあえて使用しないかぎりはもう使われない確率が高いだろう。

次に、インフォーマント1、2が「聞いたことがある」と答えた丁寧「～ます」のモス類、敬意の「～ヲ」「～ヤヲ」「～カヲ」、「～です」のゼス類、「～ごぞいます」の「～ゴジェンス」、「いらっしゃいます」の「オッジェンス（オジェンス）」について考える。

2人が聞いたのはほとんどインフォーマント1の親の代の会話内だと言う。インフォーマント1、2自身も使用していないし、現在20歳前後のインフォーマント3、4においては聞いたこともない。これらはインフォーマント1の上の世代までが使用していたのではないだろうか。

モス類は上村（1964）において「わずかに中年以上の人に残る」、敬意の「～ヲ」「～ヤヲ」「～カヲ」は岩本（1983）において「老人層で使う」とあるので、発行年と記述されている年齢層を考えると、やはり今の老年層より一つ上の世代までが使用していたと考えてもおかしくはない。

その他項目については、現在も使用されている方言であるということが確認できた。しかし、20歳前後のインフォーマント3、4においては、よく聞く機会があるとはいえほとんど使用していない。よって、これらの東諸の方言とされる特徴は、現在中年層以上で主

に使用されており、冒頭で述べた「～ディ」「～ズリ」「～モス」などと同様に現在の若年層以下の世代からは使用されなくなり、ついには消滅してしまうのではないだろうか。

3.3.2 けれどもの「～ケンド(ン)」「～ドン」について

「～ケンド(ン)」という表記は「～ケンドまたは～ケンドンの2つの形がある」という意味で使っているが、ここでは表記を簡素化するためにまとめて「～ケンドン」と記す。

先行研究で記述されていたように「～ケンドン」と「～ドン」を併用しているのはインフォーマント1のみであった。「～ケンドン」は主に日向方言として、「～ドン」は諸県方言として使用される。よって、「～ドン」の使用がインフォーマント1のみであることから、東諸が諸県方言の特徴を失いつつある過程を見ることができると推察される。

インフォーマント2、3「～ドン」を用いず「～ケンドン」を使用、インフォーマント4はどちらも使用せず「～ケン」という形で使っているということだった。インフォーマント3である筆者も自分では「～ケンドン」を使用せずに「～ケン」だけ使っていると思っていた。しかし、他の人から「～ケンドン」も使っているという指摘を受けた。このインフォーマント3、4の結果から考えると、若年層にとっては「～ケン」が主流で「～ケンドン」は使いにくいのではと感じた。

なぜそのようなことが生じるのだろうか。まず考えついたのは共通語「～けど」と「～ケン」が対応するものであると思われるからではないかということだ。単純に、共通語「～けれども」と対応するものが「～ケンドン」、共通語「～けど」と対応するものが「～ケン」と考えられる。近年は逆接の接続助詞として「～けれども」より「～けど」が主流のように感じられる。それに伴って方言でも「～けど」に対応する「～ケン」が使われるようになってきたのではないだろうか。

しかし、インフォーマント2は「～ケンドン」をよく使用しており、たまに共通語が出るとしても「～けれども」ではなく「～けど」であるので一概にそうとは言えないようだ。

筆者の内省としては、そもそも「～ドン」が使いにくい。インフォーマント1が会話中に「～ドン」を使っている様子は容易に想像できるが、自分が使っている場面は想像できないし、「～ドン」だけ聞くと宮崎で使われているイメージがない。「～ケンドン」についてもインフォーマント1や2が口にしてしている様子は思い浮かぶが、自分が使う場面は思い浮かばない。インフォーマント1、2が「～ドン」や「～ケンドン」を使用しているのをよく聞いていて違和感はないのだが、筆者含め友人など同じ世代が使っているところは聞いたことがないように思われる。どうやら「～ドン」が付くものは中年層以上が使用するイメージがあるのかもしれない。

ちなみに「～ケン」は神部(1992)によると「～ケンド」「～ケンドン」とともに「一ケンド」類形式の一つとされており、「九州東北部—豊前・豊後および日向の北部一帯」(神部、1992、p128)で使用されている。神部はさらに日向方言を使用する地域である宮崎⁽⁶⁾・西都で「～ケン」が使用されている例を挙げている。上記2地点は宮崎県の中央部にあた

る。つまり「～ケン」においては「日向の北部一帯」に限らず日向の広い範囲で使用されていると言えるだろう。宮崎市は東諸のすぐ隣である。通勤・通学・大きな買い物のために宮崎市に足を運ぶ人も多いことから、東諸に「～ケン」が流入するのも自然な流れである。

また「一ケン」は『ケンド』の末尾音の脱落した形であって、接続の意識の弱化—ぞんざいな接続意識に応じたもの（神部、1992、p128）であるとされている。言われてみれば「～ケンドン」に比べて「～ケン」の方が「～ドン」という強い音がなくなり、短くなったことで簡単に口から「～ケン」が出てくる気もする。これはあくまで筆者の思うところであるが、接続詞というより読点を打つように文を一時的に区切るというような印象に近いかもしれない。他の若年層方言話者も無意識にこのように思っているのだとしたら、「～ケン」の使いやすさによって「～ケンドン」より「～ケン」が広がっているのかもしれない。

以上より「～ケン」が広がりつつある理由は、「～ドン」は中年層以上が使用する印象がある上、使いやすい「～ケン」が日向方言地域（宮崎市）から流入してきたからと考えられる。

3.4 本章での結論

この調査の目的は、先行研究における東諸方言の記述で本当に使用されているのか疑わしい方言が多々あったのでその事実を確認すること、数少ない貴重な東諸方言の記述について現状を明らかにすることであった。

先行研究を読んで、これは東諸では使わないだろうと思っていた「～サル」、「～モス」、「～ヲ」、音韻変化、「～ゴジェンス」「～クゼンシ」「オツジェンス」が調査により本当に使用されていたのだということが明らかになった。しかも、40代のインフォーマント2が聞いたことがあるということは、その方言が使われていたのは遠い昔ではなく、ここ40年くらいの話である。筆者が知らなかった方言の存在が証明でき、現段階の東諸方言の現状を記すことができたこと、また方言の衰退という事実は嘆くべきことであるが、調査結果の表から視覚的に方言が薄れていくようすが確認できたことは筆者にとって有意義な調査になった。

4. 談話資料に見られる東諸方言の諸相

インフォーマントの会話を録音した談話資料からも多くの方言的特徴が得られた。それらを4.1音韻と4.2文法・表現に分けて記述し、先行研究と調査結果・筆者の内省と比較して考察を行う。そして、それぞれ諸県方言と日向方言のどちらの特徴か検証し、その二大方言の中間と言われる東諸方言の現状（どのくらい諸県方言が残り、どのくらい日向方言化しているか）を本調査の限られた範囲内ではあるが明らかにしたい。この二大方言についての考察はそれぞれ4.1音韻と4.2文法・表現の最後の項で行い、最後に4.3

で総合的に考察する。

括弧付きの番号がふってあるものは例文であり、特記が無い限りは談話資料から収集した文である。説明の対象となっている部分には下線をつけており、後続の括弧付きの文が筆者による共通語訳である。

文法は文の意味が重要になるので例文は丸々一文掲載しているが、音韻については意味に関係なく音の変化部分が示せばよいので主に語単位で例を挙げている。

4.1 音韻

4.1.1 撥音化

「ん」の音に変化する撥音化の例を挙げる。「に」「の」「も」「り」「る」「れ」で撥音化が見られた。

「に」……「～トン」(～のに)⁽⁷⁾

「の」……「明日ン夜」(明日の夜)、「難シイモンジャ」(ものだ)、「乗りモン」(乗り物)、「アン」(あの)等

「も」……「デン」(でも)、「オンデン」(俺でも)、「ネカン」(ないかも)⁽⁸⁾

「り」……「ヤンナイヨ」(あげなさいよ)、「帰ンナイヨ」(帰ったら?)

「る」……「ソラアンネ」(それはあるね)

「れ」……「オンデン」(俺でも)、「アンダケ」(あれだけ)

4.1.2 促音化

「っ」に変化する促音化の例を挙げる。長音・「こ」「ず」「そ」「と」「る」「れ」で促音化が見られた。

長音……「コッシテ」(こうして)

「こ」……「ソッカラ」(そこから)

「ず」……「ムッカシイガヨ」(難しいよ)

「そ」……「アッコ」(あそこ)

「と」……「コッ」(こと)

「こと」は「コッ」「ゴッ」で使用することもある。

「る」……「～ゴッ」(～のようだ)⁽⁹⁾、動詞の「～る」、～ Chol (～している)の「ル」

動詞の「～る」、～ Cholの「ル」の促音化はかなり多く見られる。分かりやすいようにそれぞれ例を挙げる。

例)「スッカ」(するか)、「入ッジャロ」(入るだろう)、「変ワッ」(変わる)

「呼バレテッ」(呼ばれている)、「分カッテッ」(分かっているから)

「れ」……「オッデン」(俺でも)

4.1.3 連母音の融合

連母音の [ai] は長音の [e:] または短音の [e] に変化する。長音の例として「ネー」

(ない)、「ミシケー」(短い)が、短音の例として「カテッ」(かたい)、「アケ」(赤い)が挙げられる。

〔ui〕は〔i〕に変化する。「アチ」(あつい)、「ヌキ」(ぬくい)、「ワリ」(悪い)がある。談話資料からは得られなかったが〔i:〕も使用する。

〔oi〕は〔i:〕または〔e:〕に変化する。〔i:〕になるものの例としては「オミー」(重い)がある。〔e:〕の例としては「オセー」(遅い)がある。

〔ae〕が〔e〕になるものもあり、「カンゲ」(考え)という変化が見られた。

4.1.4 音の変化

その他共通語とは異なる発音をするものを挙げる。まず共通語「か」を「クワ」と発音する例が見られた。「ソウクワ」(そうか)、「アットクワ」(あるのか)、「イカントクワ」(いけないのか)がそれにあたる。

共通語の「て」を「チェ」「チ」で発音することがある。その例文として「丸シチュクルツウイチ」(丸してやるよって)、「何チェ?」(何て?)「見チェ分カットカ」(見て分かるのか)が挙げられる。

共通語の「と」を「ツ」で発音することがあり、4.1.2中でも述べたように共通語の「こと」を「コツ」と言ったりする。例は「ユタコツ」(言ったこと)、「ソーイウコツ」(そういったこと)である。

また、「ヤツツヨネ?」(だったんだよね?、だったのよね?)という使用例もある。終助詞の「の」は「ト」と置き換えられ、「だ(った)」は「ヤ(ツタ)」に置き換えられる。そこで共通語「だったのよね?」が東諸方言で「ヤツトヨネ?」に変化し、さらに「ト」が「ツ」に変化し最終的に「ヤツツヨネ?」となったものであろう。

共通語で「～しない」という意味の「～セン」が「～シェン」と発音されることもある。例えば「エーシェン」で、日向方言では可能表現に「エー～」を用いるので共通語では「～できない」という意味になる。

ラ行がイになることもあり、その例は「ソイデ」(それで)、「ダカイ」(ダカラ)、「カイ」(から)である。

「か」が「キャ」で発音されることもある。例えば、「ソラ何キャ」(それは何か)というようになる。ただし老年層での使用しか見られない。

共通語の程度を表す「ほど」を「ホズ」と発音する。例えば「食べるほどご飯をつぎなさい」が「食バルホズゴ飯をツギナサイ」となる。

共通語の「そうすると」を「スト」と言う例があった。ただし、この形での使用は少ないように思われる。今回の調査では得られなかったが「ソウスト」の方が比較的使用される。そう考えると4.1.2の促音化に近いかもしれない。

共通語の「良く」は「ヨー」と発音される。また、「よかった」は「イーカッタ」と使用されることもある。今回の調査では収集できなかったが短音化した「イカッタ」も使用される。

「ここに」を「ココゲ」と言う例もあった。ただし、老年層のみでの使用だと考えられ

る。

4.1.5 助詞との融合

語末がイ段のものと助詞の「は」「が」が接続すると語末の音+拗音になる。例えば「口(くち)+は」で「クチャー」、「～に+は」で「～ニャ」、「わち(私)+が」で「ワチャ」になる。

語末のエ段に助詞「は」が接続すると、語末のエ段がア段に変化する。例は「それ+は」で「ソラ」、「これ+は」で「コラ」がある。

同様に、語末のオ段と助詞「は」が接続すると、語末のオ段がア段になる。「そんなこと+は」で「ソンナコタア」、「今度+は」で「コンダア」、「こめーこと(小さいこと)+は」で「コメーコター」ように変化する。例から見て分かるように長音化することが多い。

4.1.6 長音短呼

共通語では長音で発音される音を、長音ではなく短呼する現象が見られた。一部例を以下に列挙する。左から短呼している例、短呼されていた部分を長音に戻したもの、共通語訳を示している。

表 4.1 長音短呼の例

短呼の例	長音使用	共通語
ヤロ・ジャロ	ヤ <u>ロ</u> ー・ジャ <u>ロ</u> ー	だろ
ソ ヤネー	ソ <u>ウ</u> ヤネー	そう だねー
ネ カン	ネ <u>ー</u> カン	ない かも
チケ ケンドン	チ <u>ケ</u> ー ケンドン	近い けれども
アロカ	ア <u>ロウ</u> カ	あろうか(あるわけない、ない)
スクネ ッチャカイ	スク <u>ネ</u> ー ッチャカイ	少ない んだから
アケ	ア <u>ケ</u> ー	赤い
イヤットヨ	イ <u>イ</u> ヤットヨ・イ <u>イ</u> ヤルトヨ	言うんだよ

4.1.7 語頭の「ん」

語頭に「ん」を用いることがあり、例として「ンニャ」(いや、いいや、いいえ)、「ンデン」(でも、それでも)、「ンモネー」(うまくない、おいしくない)が挙げられる。

4.1.8 二大方言の観点から見る考察

4.1.1から4.1.7までに述べた東諸の音韻の諸相について、日向方言と諸県方言のどちらの特徴を持っているか考察する。県内全域に見られる現象や特に記述のなかった現象については触れない。

まず、「に」「の」「も」「り」「る」「れ」の撥音化について見る。「に」「の」「も」は日向・諸県どちらにも見られる特徴である。諸県方言は動詞の「る」が後続の語によってイ音化、促音化、撥音化する。4.1.1で例として「ソラアンネ」を挙げたがこれは「ある」に「ね」が後続することで撥音化したものだと考えられる。他の動詞「回る」「分かる」

なども同様である。

「り」「れ」が撥音化するという記述は見られなかったものの、諸県方言が属する薩隅方言では「ラ行を避ける傾向が強い」（岩本、1999、p.578）のだという。ここから諸県の特徴をより多く持っていると言えるのではないか。ただし、諸県方言は「ミ」「ム」も撥音化するのが特徴であり、東諸ではこの現象は見られない。

次に4.1.2で述べた長音・「こ」「ず」「そ」「と」「る」「れ」の促音化についてである。これも先述したように、「る」「れ」については動詞の「る」が促音化することと、ラ行を避けるという諸県の特徴を持っていると言える。その他長音・「こ」「ず」「そ」「と」についての記述はない。

連母音の融合は日向・諸県どちらでも見られる。両方言の違いは、基本的には、長音があるかないかの違いである。例えば連母音 [ai] は日向方言だと長音の [e:] だが諸県では [e] であるし、連母音 [ui] は日向方言だと [i:]、諸県だと [i] である。連母音 [oi] は談話資料から見られたものは [i:] または [e:] であり、前者は日向方言の形に一致している。諸県方言では [i] または隣の熊本県に近づくにつれて [e] から [e:] が優勢になるというので、調査地点は熊本付近ではないのだが、諸県方言よりの特徴だと言えるのではないか。そう考えるとやはり日向・諸県の両方の特徴を持っているという結論になる。日向方言と諸県方言の中間地点と言われる東諸らしい結果である。

4.1.4 の音変化について、共通語の「て」を「チ」「チェ」と発音、共通語の「と」を「ツ」と発音するという結果があった。先行研究においては、明確に「て」や「と」が変化するという記述はなかった。しかし、日向方言を使用する区域の宮崎市では母音を狭くする傾向があるという⁽¹⁰⁾。例えばエをイト、オをウと発音するということである。ということは「て」の母音 e が狭まったことで最終的に「チ」となった可能性もある。「と」も同じく母音の o が u になり最終的に「ツ」となったのではないか。「最終的に」と書いたのは、単純に母音を入れ替えると「ティ (ti)」「トゥ (tu)」になるからである。ここから少し変化して「チ」「ツ」になる可能性があると考えたからである。

また、ラ行がイになる例があったがこれは諸県方言の特徴である。ただし、共通語の「から」「だから」にあたる「カイ」「ダカイ」は日向方言である。残る談話資料から得られた例は「ソイデ」（それで）しかない。岩本（1969）によると諸県のラ行イ音化は「車」を「クイマ」、「祭り」を「マツイ」というのだという。談話資料からはそのようなイ音化は見られず「ソイデ」のみであり、3.の調査でも老年層しか使用していないことが分かった。諸県の特徴はわずかに残る程度だと考えられる。

「ホズ」（ほど）の例は日向方言の母音が o から u になるという特徴が、「スト」（そうすると）はラ行を避ける諸県方言の特徴によるものではないか。

4.1.5 の助詞との融合について述べる。「口（くち）+は」で「クチャー」になるのは両方言でみられる。しかし、その他の融合については日向方言で使用するということの

みが分かり、諸県方言における助詞融合の記述は見つけることができなかった。

4.1.6の長音短呼は諸県方言の特徴の一つと言える。ただし、諸県方言では長母音を使用することがないらしいが、談話資料から得た結果では短呼のものもあれば長母音のまま発音するものもある。日向方言では基本的に長短の対立があり、地域によっては長音短呼があるという状況である。よって、完全に諸県の特徴とも日向の特徴とも言い切れず、これも両方言の特徴が半分ずつといったところかもしれない。

以上より、音韻についてはほぼ両方言の特徴が見られるということになる。続いて文法・表現についても同じように調査結果を示し、日向・諸県方言の特徴の割合を考察していく。

4.2 文法・表現

4.2.1 否定

否定表現の共通語「～ない」は「～ん」に対応する。東諸方言の「イカン」は共通語「行く」の否定「行かない」の意味と、共通語「(～しては)いけない」「(～しなくては)いけない」の両方で使用される。また、「する」の否定「しない」は「セン」になる。

- (1) ヨーハズサンカモシレン。(はずせないかもしれない。)
- (2) 何モナラン。(何にもならない。どうしようもない。)
- (3) 買ワ^ンワケイカン。(買わないわけにはいかない。)

4.2.2 逆接の「～けど」

3.でも述べたように、逆接の「～けど」を「～ケン」や「～ケンドン」で用いる。ここではその使用例を挙げる。上から形容詞接続の例、名詞接続の例、文頭の例、文末の例である。

- (4) 洗ウノハイイケン、雨ヤカイ乾カンワ。(洗うのはいいけど、雨だから乾かないよ。)
- (5) 一泊ヤケン、行ッテクルワー。(一泊だけど行ってくるね。)
- (6) ダケン、邪魔ヨネー。(だけど、邪魔だよね)
- (7) カンゲツカンケンネ。(考えつかないけどね。)

(5)は名詞に接続するので「ヤ(だ) +ケン(けど)」の形になる。例文(6)のように、文頭で使用する「だけど」にもそのまま「ダケン」が対応する。文末に用いる場合、「ケン」単独では文末で使用しにくい。(7)のように「ネ」や「ナ」「サ」の終助詞を共に用いるか共通語の「けど」を用いる。

さらに「ケンドン」も形容詞接続・名詞接続・文末で使用される例が見られた。文頭での使用は今回の調査では見られなかった。

- (8) チケケン^{ドン}、ココヘンノ人達が使ワ^ン言葉モアルワ。(近いけど、この辺の人達が使わない言葉もあるでしょう。)
- (9) 2日ヤケン^{ドン}ヨ。(2日だけどさ。)
- (10) クチャー コンナツチャケン^{ドン}。(口(話し方)はこんな風だけど。)

4.2.3 「～から」「(～) だから」に対応する「～カイ」

理由を表す共通語の「～から」「(～) だから」⁽¹¹⁾がそれぞれ「～カイ」「(～) ダカイ」と使用される。

共通語の「～から」の部分が「～カイ」に変化するだけでなく、「(～) だから」の「だ」の部分が東諸方言での断定の助動詞「ジャ」「ヤ」に変化し、「(～) ジャカイ」「(～) ヤカイ」の形で用いられることが多い。

- (11) 暑イカイヨ。(暑いからさ。)
- (12) ダカイ、イヤヤッチャロウカー ト思ッテ。(だから嫌なのかなーと思って。)
- (13) ジャカラ、空イテレバ…。(だから、空いてれば…。)
- (14) 仕事ヤカイヨ。(仕事だからさ。)

また、東諸方言では相槌として「ダカイヨ」「ジャカイヨ」「ヤカイヨ」をよく使う。今回の調査では「ジャカイヨ」のみ見られた。相手の発言に同意・肯定し「そうなんだよ」「自分もそう思う」の意味を持つ。ただし、自分が第三者の立場ではなく、自分に影響することでないといけな。以下の例文で説明する。

友達に宿題多すぎだよね、と言われて

- (15) ジャカイヨ！(そうだよね。自分もそう思う) [筆者作例]

このように「ジャカイヨ」が使用できるのは、自分と友達のクラスが一緒に自分も友達と同じく宿題が多いとき、つまり宿題の多さが自分にもかかわっているときである。逆に自分のクラスでは宿題が少なかったが、クラスが違う友達の宿題を見せられて上のように「宿題多すぎだよね」と言われたとき、たとえ友達の宿題の多さに「そうだね」と同意しても自分に宿題の多さは関係しない(第三者の立場になる)ので「ジャカイヨ」は使えない。

談話資料では次のような例も見られた。

千葉に行く日に台風が来るねと言われて

- (16) ジャカイヨ。(そうなんだよね。 だから困るんだよね。)

共通語訳の後半に書いたように、実際の会話では「台風が来ると困る」という発言は出ないが、無意識に「台風が来るね」＝「大変だね、困るね」という意味が含まれていることを理解し、それに同意したり、前の文を受けてそれが理由で困るという意味を含んで返答しているように考えられる。

形式だけ見ると相槌で、同意や相手の意見を肯定するという働きが大きい。しかし、このように会話に含まれた意味まで考えると、やはり理由の「だから」の意味も多少はあるようである。

4.2.4 「～ように」の「～ゴツ」

共通語の「～ように」を「～ゴツ」で表す。

- (17) 忘レンゴツ。(忘れないように。)
(18) 大丈夫なゴツヨー。(大丈夫なようにだよ。)

「～ように」と訳す必要がないものもある。

- (19) 分カランゴツナル。(分からなくなる。)
(20) 使ワンゴツナル。(使わなくなる。)

「～ゴツ」ではなく「～ゴト」で「～ように」を表す例もある。

- (21) イツモンゴトハナイケド。(いつものようにではないけど。)

本調査で得られた談話資料では否定形に接続する例が多かったが、肯定形でも使用できる。

- (22) 分カルゴツシトキナイヨ。(分かるようにしておきなさいよ。)[筆者作例]

4.2.5 可能表現

本調査では不可能表現(～できない)のみしか出なかったが、「ヨー～ン」、「エー～ン」、「～ガナラン」という例が見られた。

- (23) ヨーハズサン。(はずせない。)
(24) エーシェン。(できない。)⁽¹²⁾
(25) コレニ入レガナラン。(これに入れられない。)

4.2.6 受身・可能の「～(ら)れる」に対応する「～ルッ」

共通語で受身・可能などを意味する「～(ら)れる」は、東諸方言では「～ルッ」となることが多い。

- (26) 言ワルッヨ。(言われるよ。) 受身
(27) 食ベルッガ。(食べられるよ) 可能
(28) シテクルッワイ。(してくれるよ。してやるよ。)

4.2.7 尊敬の「～ヤル」

低い尊敬表現の「～ヤル」が使用される。使用されている状況を見ると、年上や親・祖父母だけでなく、年下の子供相手(姪)や自分自身まったく関係のない(姪の学校の先生)などにも使っており敬意はかなり低いか無いに等しいように思われる。三人称の行動について「～ヤル」を付けることが多いようである。

「～ヤル」は以下のように文脈や接続によって変化する。

- (29) 使イヤルゴタッタモン。(使っているようだよ。使っていると思うよ。)
(30) 来ヤッタ。(来た)

(31) 言イヤットヨ。(言うんだよ。)

(32) シャベリヤランゴタツネ。(しゃべらないようだね。)

(30) は過去形の「～ヤッタ」、(31) は「～ヤル」の「ル」が促音化した例である。

(32) は「～ヤル」の否定形「～ヤラン」とその前の「しゃべり」が接続して「しゃべり+ヤラン」→「シャベリヤラン」に変化したものと思われる。同様に「～している」の意味を表す「～チョル (～チョッ)」と融合して「～チョル+ヤル」→「～チョリヤル」となるものもある。

(33) 着イチョリヤッヨ。(着いているよ。)

4.2.8 「～チョル」「～ヨル」

「～している」の意味で「～チョル」「～ヨル」が頻繁に使用される。「ル」は促音化して「～チョッ」「～ヨッ」の形で使われることが多い。否定形は「～チョラン」「～ヨラン」だが、筆者の内省では「～ヨラン」はあまり使用しない。今回の調査でも見られなかった。

(34) 押サエチョルヨ。(押さえているよ。)

(35) 呼バレチョッ。(呼ばれている。)

(36) 言ッチョッタ。(言っていた。)

(37) 決マッチョラン チャケンネ。(決まっていないんだけどね。)

(38) アリヨルヨ。(あるよ。やっているよ。)

(39) キレーシヨットヨ。(きれいにしているんだよ)

(40) 入レヨッタケド。(入っていたけど)

(34) ~ (37) が「～チョル」、(38) ~ (40) が「～ヨル」の例である。それぞれ上から「～チョル」「～ヨル」の使用、「ル」が促音している例、過去形の例、否定形(「～チョル」のみ)を挙げている。

本来の働きとして「～チョル (トル)」は已然態、「～ヨル (オル)」は進行態を表すが、宮崎県では区別がなく⁽⁴³⁾、上で挙げた例もすべて進行態のようである。(36)、(39)、(40)は文全体の意味としては已然態のようであるが、「～チョッタ」「～ヨッタ」と過去形になっているのでそのように見えるだけではないか。本来「～チョル」が已然態を表すときは過去形ではなくそのままの形で「(地面が濡れているのを見て) 雨が降ッチョル」(雨が降ったようだ)と使用できるはずである。

4.2.9 「～(し)方^{かた}」

東諸方言では「～(し)方^{かた}」という表現がある。例えば以下のように使用する。

(41) オミーワ、コレ、持ッチヨリ方ガ。(重いわ、これを持っているのは。)

(42) ドヤッタ? 今日、国富⁽⁴⁴⁾マデ行キ方ハ。(どうだった? 国富まで車を運転して行ったのは?)

どうやら「動詞の連用形+方」で動詞を名詞のように扱っていると考えられる。また、今回の談話資料では得られなかったが、飲み会を表す「飲み方」と言う使用例もある。筆者は幼いころから聞いているのでそのような名詞だと思っていた。しかし、共通語ではな

いらしいので「飲み+方」で飲むという行為が名詞化されたものと本稿を書くことで知ることができた。

4.2.10 「～という」

共通語の「～という」を「～チュ」や「～ツ」で表す。例を以下に列挙する。

- (43) 使ウツチュウカ (使うというか)
- (44) チュウカ、ソソ前ニ (中略) 帰ッテコンニヤイカンワ。(というか、その前に帰ってこないといけないでしょ。)
- (45) ウドンツチュウッタワ。(うどんって言ったじゃない。)
- (46) 「カカシンゴッサルガ」ツチュウワセン? (「あれはかかしのようだ」って言わない? 言うでしょ。)
- (47) 嘘ハ ツケンチュエアルワケヨ (うそはつけないって言うわけよ。)
- (48) アイスタンツツタカラ。(あいすくんって言ったからー。)
- (49) ○○放送アルツツタラ マタヤー トカテ言ッテョッタワ。(○○の放送あるって言ったら「またやー」って言ってたじゃない。) ○○はテレビ番組の名前
おそらく「～って言う」をもとに、3.1.4であったように「て」が「チ」に変化し、「～ツチ+いう」が融合して「～ツチュ」になったのだと考える。(46)の否定形「～チュウワセン?」は「～ツチ+言ワセン⁽⁴⁵⁾(言わない)?」からきているのだろう。(47)の「～チュエアル」は「～ツチ+言イヤル」の融合だろう。

4.2.11 その他表現

その他の表現について、例を挙げつつ説明する。

- (50) 入ラセンカ知ラン。(入るのではないか。入るんじゃないかな。)
「～カ知ラン」という表現をよく使用する。「～ではないか」「～だろう」という推量の意味を表す。主に「動詞の未然形+センカ知ラン」で「[動詞] するのではないか」という意味になる。談話資料内にはなかったが、「ドウカ知ラン」という使い方もあり、「どうだろうか」という意味になる。動詞が付く場合はその動詞が起こりうるだろうという推量である。しかし、「ドウカ知ラン」の場合はより起こりうる可能性が低くなり、本当に分からない・疑わしいという意味になる。
似たような形に次のようなものもある。

- (51) 戻ラセン? (戻るのではないか、戻るでしょ?)

上の例文と比べて「～カ知ラン」が省略されている。そのせいもあるのか、こちらの方が物事の起きる可能性が高いように思われる。例文を使って解説すると、発言した本人は「戻るもの」と確信していて、それを聞き手に確認したり言い聞かせているような印象を受ける。

(52) 出シナイヨ。(出しなさいよ、出したらいじゃない)

(53) ヤンナイヨ。(やりなさいよ、あげなさいよ、あげたら?)

「ナイ」とあるので否定形のように思えるが、逆にその動作を命令したり、「したらいじゃない?」と相手を促す際に使用する。上の例文にはないが、語尾に「よ」が付かず「～ナイ」だけの使用も可能である。

(54) 出サナイカン。(出さないといけない。出さなきゃ。)

「動詞の未然形+ナ+イカン」で「～しなければいけない」の意味になる。「～しなければいけない」は「～セナイカン」となる。

類似した形で次のような使用例もある。

(55) 帰ッテコニヤイカン。(帰ってこなければいけない。)

「動詞の否定形(未然形+ン)+ニヤ+イカン」で上と同様に「～しなければならない」の意味になる。「～しなければいけない」は「～センニヤイカン」となる。

(56) ジャア。(そうだよね。)

(57) ジャアジャア。(そうだそうだ。)

(58) ソウジャワー。(そうでしょ。)

(59) ジャアワー!(そりゃそうでしょう!)

相槌として使用される表現である。東諸の方言では「ジャ」は共通語の断定の助動詞「だ」に対応するので、「そうだ」「そうだよね」「そうだわ」などの「そう」を省略し方言化した形だと考えられる。

4.2.12 二大方言の観点から見る考察

音韻を考察したのと同様に、調査から見られた東諸の文法・表現の諸相について日向方言と諸県方言のどちらに当てはまるか考察を行う。

4.2.2の逆接の「～けど」について、談話資料からは日向方言で使用される「～ケン」、「～ケンドン」しか見られなかった。3.の「先行研究における東諸の特徴確認」でも述べたように諸県方言の「～ドン」は老年層でしか使用されていない。また、老年層は日向方言の「～ケンドン」も使用しているので、逆接の「～けど」は日向方言が優勢のようである。

4.2.3の理由を表す「～カイ」(から)「(～)ダカイ」(だから)は日向方言である。諸県方言では「～ヂ」「～デ」が使用されるが、本調査では見られなかったし、使用されているのを聞いたことがない。

4.2.4で述べた「～ゴツ」(～ように)は日向方言に近いと言える。もともとは「～のようである」の意味で「～ゴトアル」が使われていたが、変化形として日向では「～ゴツアル」「～ゴタル」、諸県では「～ゴタイ」が使用される。談話資料から得られなかったものの「～ゴタル」も使用されており、逆に「～ゴタイ」は使用されていない。よって

「～ゴツ」に関しては完全に日向方言の特徴を持っている。しかし、4.1.2の促音の項で例を挙げたように「～ゴタル」は「～ゴタッ」と発音することも多く、日向方言の形でありながら「る」を促音化する諸県の音韻的特徴が同時に見られる。

4.2.5の不可能表現については日向方言の「ヨー～ン」「エー～ン」、諸県の「～ガナラン」の両方の特徴が見られた。この日向方言は能力可能（自分の能力によって可能・不可能なもの）を表すらしい⁽¹⁶⁾が、談話資料からは状況可能（周りの状況や環境によって可能・不可能なもの）での使用と思われる例があった。例えば、犬の首輪の留め具があまりにも固すぎて「ヨーハズサン」（外せない）や、相手が目上の人だから軽い挨拶を「ヨー使ワン」（使えない）である。能力可能の例としては、いきなり方言についてしゃべれと言われても「エーシェン」（できない）である。

日向方言の状況可能は本来は「～ル」「～ルル」であるが、筆者はあまり聞いたことがない。しかし、40代のインフォーマント2は使うと言っていた。4.2.6の「～（ら）れる」が「～ルッ」に変化する項で「食ベルッガ」（食べられるよ）という例文を挙げた。これはもしかしたらもとは「食ベルル」で、ルが促音化したことで「食ベルッ」になったのかもしれない。使われていた場面もチョコが溶けたけど「食ベルッガ」（食べられるよ）という状況可能である。ここで「～（ら）れる」が「～ルッ」に変化したというだけのものか、「食ベルル」が促音化したものかを判断をすることはできない。諸県方言の「～ガナラン」は能力・状況可能の区別はない。

以上より、文法・表現の点においては「る」の促音が見られるものの、多くの日向方言を使用している。

4.3 本章での結論

談話資料から得られた東諸方言の特徴について、4.1.8と4.2.12で日向方言と諸県方言のどちらの特徴を持っているか考察した。その結果を視覚的に表すために簡単に次ページの表4.2にまとめる。

表 4.2 諸県方言・日向方言の特徴の有無

特徴	諸県方言	日向方言
4.1.1 撥音化	る・り・れ ○	△
4.1.2 促音化	る・れ ○	—
4.1.3 連母音の融合		
[ai]	[e] ○	[e:] ○
[ui]	[i] ○	[i:] ○
[oi]	[e:] ○	[i:] ○
4.1.4 子音の変化		
母音が狭くなる	—	e → i, o → u ○
ラ行のイ段化	「ソイデ」 △	—
4.1.5 助詞の融合	—	○
4.1.6 長音短呼	短呼が多い △	長音がある △
4.2.2 逆接「～けど」	「～ドン」 ×	「～ケン」 ○
4.2.3 理由「～から」「～だから」	「～ヂ」「～デ」 ×	「～カイ」 ○
4.2.4 「～ように」の「～ゴツ」	「～ゴタイ」 ×	「～ゴツ」「～ゴタッ」 ○
4.2.5 可能表現	「～ガナラン」 ○	「エー～ン」 ○

表中の二重線より上は音韻の特徴、下は文法・表現の特徴である。「—」の項目は、今回得られた方言特徴について、先行研究に記述がなかったことを示す。また、△で示したものは、完全にその特徴を持っているとは言えないものである。例えば撥音化の日向方言△というのは、「に」「の」「も」の撥音化は日向・諸県両方言にあるので、日向方言の特徴を持っているとは言いきれないという意味である。ラ行のイ音化の諸県が△であるのは、音韻の考察で述べた通り、ラ行のイ音化の特徴はあまり見られずわずかに残る程度だと考えたからである。長音短呼についても考察で述べた通り、諸県方言ほどは短呼が徹底していないし、日向方言は基本的に長音があり長音短呼は地域によるのでどちらに当てはまるか確定することができず、表のように示している。

では、談話資料から得た範囲内のみであるが、東諸で話されている方言が日向・諸県の方言特徴をどのくらい持っているかをここでまとめる。

音韻、文法・表現のそれぞれの考察と表より、音韻ではまだ諸県方言の特徴を持っているが、文法・表現においてはほぼ日向方言化していると言える。諸県方言の音韻の特徴を持っていると言っても連母音・長音短呼においては日向方言の特徴も有しているし、諸県方言の属する薩隅方言の大きな特徴である閉音節⁽¹⁷⁾が見られない。ラ行の回避、主に「る」の促音化は多く見られるがそれが根強く残っている程度で、諸県方言の特徴はわずかにしか残っておらず大部分が日向方言化していると言える。

5. 最後に

本研究の目的は諸県方言と日向方言の特徴をどのくらい所有しているか、東諸方言の現

状を捉えることであった。

まず、3.では東諸方言の現在の使用状況を調査した。ここで筆者が知らなかった方言が使用されていたということ、現在では年齢が若くなるにつれて東諸方言の使用が少なくなっているという状況を確認することができた。

そして、4.の調査・考察により、東諸が持っている諸県方言の特徴で目立つものはラ行の撥音化・促音化、本稿では掲載していないがあとは動詞の活用くらいで、その他大部分が日向方言化していることが明らかになった。だからといって東諸の方言を日向方言の枠組みに入れると考えるのは早いのでないか。本文中にも述べたがラ行の撥音化、特に「る」の撥音化は頻繁に使用され、とても根強く残っているからである。一方で日向方言が小方言の総称であることを考えれば、ほぼ日向方言化しており且つ諸県の方言特徴を1、2つほどしか持っていない東諸方言も小方言の一つとされてもおかしくはない。買い物・通学・通勤のために日向方言の地域（宮崎市）に通う機会も多々あるので、日向方言化を抑えることが難しいのが現状である。

【注】

- (1) 岩本（1969）「宮崎」；岩本（1983）「10.宮崎の方言」；岩本（1999）「宮崎県諸県方言の素描」；日高（1992）「宮崎県方言」
- (2) 九州を豊日方言・肥筑方言・薩隅方言の三大方言で分類した場合、諸県方言（地域）は薩隅方言に属する。
- (3) 岩本（1969）「宮崎」；岩本（1983）「10.宮崎の方言」；岩本（1999）「宮崎県諸県方言の素描」；上村（1964）「薩隅方言の区画」
- (4) 「東諸では～である」というように、明確に東諸での使用が記述されている特徴のことを指す。
- (5) 岩本（1969）「宮崎」；岩本（1983）「10.宮崎の方言」；岩本（1999）「宮崎県諸県方言の素描」；上村（1964）「薩隅方言の区画」
- (6) ここでの「宮崎」は「宮崎県」ではなく「宮崎市」を意味するものだと思う。
- (7) 共通語「～の」が「～ト」に変化するので「の」が「ト」に、「に」が「ン」にそれぞれ変化した例である。
- (8) 共通語「ない」が「ネー」に変化し、さらに短呼して「ネ」になっている。
- (9) 「～ゴタル」が共通語の「～のようだ」の意味で使われる。
- (10) 日高（1992）「宮崎県方言」
- (11) 「から」は文頭で使用しないので「～から」、「だから」は文頭および文中で使用するので「（～）だから」と表記している。
- (12) この例文および解説は3.1.4で既出であるがここで再度説明しておく。「シェン」は「セン」（しない）の音が変わったものであり、「エー」がついたことで可能形（ここでは「しない」という否定形なので不可能形）になるので「できない」という意味になる。
- (13) 岩本（1969）「宮崎」

- (14) 地名。宮崎県東諸県郡国富町
- (15) センは共通語「しない」
- (16) 岩本 (1969) 「宮崎」
- (17) 母音の脱落によってキ・ク・チ・ツ・ギ・グ・ビ・ブ・ヂ・ヅなどが促音化する現象。

【引用・参考文献】

- 岩本実 (1969) 「宮崎」九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』(改訂版1991) 風間書房
- 岩本実 (1983) 「10.宮崎の方言」飯豊毅一他編『講座方言学9—九州地方の方言—』国書刊行会
- 岩本実 (1999) 「宮崎県諸県方言の素描」『日本列島方言叢書26 九州方言考4 熊本県・大分県・宮崎県』ゆまに書房
- 上村孝二 (1964) 「薩隅方言の区画」日本方言研究会編『日本の方言区画』東京堂
- 神部宏泰 (1992) 『九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 国立国語研究所 (1959) 『日本方言の記述的研究』明治書院
- 後藤和彦 (1961) 「5. 鹿児島・宮崎南部」東条操監修『方言学講座 第4巻』東京堂
- 小林隆・篠崎晃一編 (2003) 『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 小林隆・篠崎晃一編 (2007) 『ガイドブック方言調査』ひつじ書房
- 真田信治 (1999) 『展望 現代の方言』白帝社
- 陣内正敬 (1996) 『地域語の生態シリーズ 地方中核都市方言の行方—九州』おうふう
- 瀬戸口俊治 (1999) 「九州南部地方の「方言分派」状態のうちとくに西南辺諸分派の古態性について」『日本列島方言叢書23 九州方言考1 九州一般』ゆまに書房
- 中條修 (1989) 『日本語の音韻とアクセント』勁草書房
- 日野資純 (1986) 『日本の方言学』東京堂出版
- 日高貢一郎 (1992) 「宮崎県方言」平山輝男他編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
- 村田真美 (2003) 「宮崎方言の「チャ」と「ト」」『阪大日本語研究』15 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBNIHONGOK/15-06.pdf> (2011.06.09入手)

(ごうはら・かなみ 千葉大学文学部日本文化学科2012年卒業)